



”伝受・伝習・伝達”

ふるさと探訪

# 新々の記

## 課外授業

割り当てた学科や定められている課業以外のことを学校などで教えたり授けたりする「課外授業」がNHKで放映されている。名立たる専門家（職人）が母校の小学校で文字通りの課外授業を実演するのである。

**黍がら細工**：「ばあちゃんが作ったトキビのつっかけはあったかいし、運動場での滑りっこではとつてもよく滑って、二等賞をとったよ。」  
「そうかい。そりゃよかったね。今度はヒモ付きにするかな。格好悪いかもしれないよ。」

本当はズック靴が欲しいが、我慢して、祖母手製のスリッパで……  
「そういえば、お年玉を叩いてやると買ったズック靴をはいた時の嬉しさは忘れられない。そして祖母がこそと手渡してくれた「内緒のお年玉」のこと。」

前後して、五年生の冬休みには学校の工作室で「ばあちゃん教室」が開かれた。黍がらや稲藁の細工、編みもの、そして自慢の漬けもの等、正に手作りの伝受・伝習・伝達の課外授業であり、今風の社会人講師そのものであった。  
しなやかに解した玉蜀黍の内皮、

木槌で柔らかくした藁、綿羊の毛で紡いだ毛糸、そして豚汁と各種の漬け物で頬張ったおにぎりの味、おふくろの味。  
「まさかこんなばあちゃんでもないのかい。」と言いつつも、重い腰の割にはせつせと準備に余念がなかつたばあちゃんの背中には、ほんわかと丸かった。

**蔓細工**：近所の雄作じいさんは徳島県祖谷の出身で、なかなかの話し上手であったから、「祖谷の蔓橋」の話を事細かに聞かせてくださった。エンピツと西洋紙（B4版）を出すと、お茶代わりの「ちよつといつぱい」のモッキリ酒をうまそうにほんのちよつびりと口にくみながら、図示説明を続けられたのである。うまそうに、嬉しそうに。  
「そういえば、定年も真近なころに買い求めた「日本の民俗徳島（金沢治著・第1法規）」には国の重要民俗資料に指定されている「かずら橋」が図説され、材料となる「しらくちかずら（さるなし）」は雌雄異種の落葉植物で、普通の葛や藤のかずらとは違って、地面や樹木に巻きつかず、分枝して一直線に大樹の枝や断崖などを伝って延び、大きいものは

直径15センチメートルにもなるというのである。この架橋術は現代の橋梁学者からも力学にかなったものとして驚嘆されているという。雄作じいさんの声はまだ耳に残っているような蔓細工の話ではあるが、細工というよりは造形というべきであらう。

蔓細工といえば、雄作じいさんからいただいたキセルは「コクワの蔓」で作った世界でただ二つの貴重品である。

**樹皮細工**：岳樺（白樺に似ている。五月ごろに開花）をはじめ、薪の材料となった各種の木の皮で作った額縁や皮絵に夢中だった少年時代。  
「そういえば、無一の親友も今は点滴で闘病中とか。樹皮・落ち葉・蔓・枯れ枝など、まさしく「ガラタ細工」の素材集めに没頭した親友と二人で、恩師の家の物置小屋に通った日もまた課外授業だったのかも。」  
「教育とは可能性を引き出す働き」とか。多様な「ふるさと学習」とは、さて……

（元）郷土史編集専門員  
尾池隆男